

研究推進委員会通信

平成 30 年 12 月 27 日

11 月 26 日（月曜日）に本校で第 3 回授業研究会を実施しました。生徒の読解力育成に向けた取り組みの成果の確認を意図し、「探究する場」ではなく「探究した内容を発表する場」を公開しました。また、教科横断の知識技能の活用や探究のサイクルを回す必要性を明示しました。再来年度から本校で実施する学校設定科目「地域探究」・「観光ビジネス基礎」でも本授業が役立つと思います。

本授業研究会後のアンケートではほぼ全ての教員が読解力育成に向けた授業改善に取り組んでいることがわかりました。生徒が学びやすくするための環境づくりは必要です。私自身も今年度はあるクラスで 4 月当初は主体的に取り組ませることに苦労しましたが、現在は最初に見通しを話し細かく時間を区切りながら授業を進めることや、自己評価票を記入させ一言コメントを書いて返却していくことで、決められた時間を集中して取り組み、教え合いを積極的に行う姿が見られるようになりました。自己評価票には、主体的になったと捉えられる感想を書く生徒が大幅に増えました。そのクラスの生徒に話を聞いてみたら「授業の内容がわかるから静かに取り組むのだと思う」とのことでした。「読解力の育成」のために授業をコーディネートされたのであれば、ぜひ次のステップである成果の検討を始めてください。PDCA サイクルの P・D の次は C と A が待っています。また、今回の授業研究会には白鳥地域の小・中学校、郡上市教委から 9 名の先生が参観に来てくださりました。その感想には郡上市立の中学校が取り組んでいる「Good 郡上プロジェクト」によって探究をテーマに連携が深められないかなど「生徒の学び方における中高連携」が模索されるような感想も見られました。

12 月 20 日（木曜日）に名古屋市で新大学入試に向け、高等学校がどのように総合的な「探究」の時間を計画していくべきかの講演を聞いていきました。その講演は全国 3 か所で同時に実施されましたが、参加者が 1000 名を超えるということで、全国的に大きな関心が寄せられていることが伺えました。すでに本校では進路指導部が中心となって総合的な学習の時間における系統的なキャリア教育の計画がされていますが、現時点において総合的な「探究」の時間で求められる目標を達成することは十分可能な基盤が整えられていると感じました。ただ、学校側が場面を用意しても、参加する生徒自身が当事者として場面の意図を理解しなければ意味がないという話を聞き、いかに教師側（学年単位・学級単位）が活動の価値づけをするかが今後の課題だと思いました。そのためにも、ルーブリックの導入などを通して、教員だけでなく生徒自身も成長を可視化できるようにする工夫が必要だと感じました。ぜひ学年単位で総合的な学習の時間の際にプリントなどを準備し、生徒に自己評価（変容の記録）をさせてみてはどうでしょうか。

また、大学側の意見として、特別活動の評価として、活動しただけでは意味がないと断言されました。「どのような価値観に基づいてその行動をとり、どのように考えたか（どう変容したか）」まで求められるそうです。そのためにも、1 年生のころから単なる活動や活動内容の記録ではなく、本人の意識の変化や考えを書きためておく必要があるとのことです（いわゆるポートフォリオの作成）。これは教員の推薦書の作成でもいえることです。アドミッションポリシーに合致した人物である証明に「どのような活動に参加した」のか、「なぜその活動に参加した」のかなどこと細やかに状況を知ることが必要になります。特に推薦入試が主流の本校にとっては喫緊の課題になります。何かしら記録をとるなどの対応が必要となりますので、まずは大学進学を希望する生徒を対象に例年実施している検定やボランティア活動、部活動成績の確認用紙を改変するなどして学年団での対策を検討し、学校内でシェアしていきませんか。

異校種教員の参観



ポスターセッション



助言を聴く生徒

